

仏教文献との出会い

落 合 俊 典

はじめに

本日は歴史と伝統のある駒沢大学仏教学講演会にお招き頂き有難うございます。

実は私と致しましては、二重に「僭越ながら」という気持ちで臨んでおります。一つは禅学、禅仏教研究の専門の先学・大徳の前で禅に関するお話をすることであり、これは僭越を通り越してお恥ずかしい気持ちで一杯ですと言ったほうが適切です。

僭越の二番目とは、禅のお話をするということに至った理由、前段階の話もしなければならぬのですが、これは私の歩んできた研究の軌跡を語ることになり、誠に気恥ずかしい限りであります。こちらから話をはじめます。

私自身は一体何を研究しているのか、それは主体的とは到底言えない状態であることは少しく私の研究論文を見渡した

方の共通する感想かと存じます。

中国の三、四世紀成立の疑經の研究をしているかと思うと、日本の一遍の踊念仏和讃について小論を認めています。六世紀書写の敦煌写本と奈良写経本とを比較したり、唐代長安の一切經の系譜と日本古写經の系譜を辿ったりもしています。そして日本古写經のデータベースを立ち上げ、その次には南宋思溪版の影印版出版のため楊守敬購入の中国国家図書館蔵本と愛知県岩屋寺の思溪版を取り上げたりしています。

このような大風呂敷の取り上げ方は少なくとも学問的とは程遠い有様と言つて過言ではありません。

*

*

けれども一見雑多とも見える展開の端緒は義浄の『大唐西域求法高僧伝』の訳注研究からでした。牧田諦亮先生の京都マニシオンで毎週開催された研究会で訳注研究を行い、約二カ年かけてほぼ完成しました。その解題を私が書くことにな

り、それまでの輪読会で長らく疑問に思っていた課題を解明しようとして挑戦しました。

それは書名と内容の乖離でした。「求法」の「高僧」の伝記であるにも関わらず義浄自身の伝歴が多すぎる上に、不肖の弟子たちのことまで書かれています。これがインド戒律仏教至上主義、原理主義の義浄の思念に入っていたとは到底考えられませんでした。あれこれ苦しんだ挙句、本来の書名は別の題名ではなかったかと思うようになりました。義浄がシュリーヴィジャヤ国（室利仏逝国）から本国番禺（広州）へ著書を送ります。その時の本が『南海寄帰内法伝』ですが、序文のところに『大唐西域求法高僧伝』も一緒に送付すると書かれています。もしかすると古い写本や刊本に別の書名が残っていないかと思いました。あれこれ一生懸命探しますと、奈良写経本（現天理大学図書館蔵）と敦煌本（ペリオ本）と七寺一切経本とに共通する原題が書写されています。『大周西域行人伝』です。しかし、これで一件落着とはいきませんでした。何故変更したのでしょうか。その理由がどうしても分からないのです。誰が何時実行したのか。義浄自身でないことは分かるのですが。義浄が逝去したのは西暦で言いますと、七一三年です。「大唐西域求法高僧伝」の記述が現れるのは、七三〇年の『開元録』（智昇撰）が濫觴になります。

後にこの理由の一端が見えてきますが、この時に思わぬ副産物が見つかります。それは七寺一切経に含まれていた古逸經典です。平安時代の院政期に尾張で写経されたのですが、そこに不思議な一群が残っていました。『開元録』で不入蔵とされた經典類一一八部二四七卷の内、およそ四三部一〇五卷が写経されていたのでした。智昇が不要と認定した經典を入蔵リストから削除した經典群です。

不要とした理由は八条にわたっています。

(一) 右『密迹力士経』以下の二十二部八十卷は皆『大宝積経』（百二十卷）に編入されているので別本（とする理由）が無い。

(二) ～ (七) 略

(八) 『浄度三昧経』以下十部十五卷は、古の旧録には偽疑経とされている。『大周録』が真経として編入したが、内容が人の作ったものと見られるのでこの『開元録』から除いて不載とした。

『大宝積経』は唐代の菩提流支の訳であります。以前に訳された二十二部八十卷をそのまま収録して残りの四十巻を訳して成った經典です。削除するのは理の通ったことですが、また『浄度三昧経』や『毘羅三昧経』などの疑経を不載とするのも経録の理念から当然のことです。しかし、今日的観点から見ますとこれら疑経は敦煌から発見された疑経群と

同等の価値を有するものです。

早速五十名の会員からなる七寺古逸經典研究会（一九九〇年四月）を立ち上げました。これらの研究成果が『七寺古逸經典研究叢書』全六冊（一九九四年—二〇〇〇年）です。

そこには『毘羅三昧經』・『清淨法行經』・『淨度三昧經』・『大通方広經』・『觀世音三昧經』・『十六卷本』・『仏名經』・『大乘菩薩入道三種觀』・『三階仏法』・『馬鳴菩薩伝』・『大乘毘沙門功德經』・『大乘授戒經』・『貞元入藏録』・『古聖教目録』（擬題）等が収録されています。立場上すべてに目を通さなければならず、大変勉強になりました。

*

*

つぎに「勉強」しなければならなくなったのが安世高です。金剛寺一切經の中に不思議な經典（『十二門經』）があるので意見を聞きたいと梶浦晋氏から電話がありました。その經典は牧田先生の大正大学における『弘明集』集中講義で私が担当した箇所に残した経名でした。訳者は安世高です。写真を見ると『弘明集』とほぼ同文でした。仁寿二年（六〇二）に逸書と記された安世高訳『十二門經』が日本の河内長野市にある天野山金剛寺に鎌倉写本として存していたことは大変な驚きでした。しかも現行本と異なる『安般守意經』まで出てきました。

宇井伯寿先生や荒牧典俊先生、また海外の研究者が関心を寄せる安世高訳『安般守意經』、これは大正本のように注が本文に混入していない經典です。

この研究成果が『金剛寺一切經の基礎的研究と新出仏典の研究』（平成二二年度〜平成一五年度科学研究費補助金基盤研究(A)1)平成一六年三月）です。

安世高訳の研究には、梶浦晋、デレアヌ・フロリン、Stelano Zaccarelli、赤尾栄慶、辛嶋静志、本庄良文、衣川賢次各氏と筆者が当たりました。翻刻は三宅徹誠氏が担当しました。

ところで金剛寺一切經の調査・研究は、従来と全く異なる方法で実施することになりました。今までの一切經研究は主に史学の立場からの調査・研究でしたから經典の写真は外題と内題と尾題の三か所程度でした。内容は「經典はみな同じ」という前提で進められていました。仏教学者が参加する場合にも經典の内容に踏み込んで調べようとする動きは全くなかったのです。

私が科研申請の代表者でしたが、研究的には少数派、いえ一人だけの孤獨な立場でありました。金剛寺一切經四千数百巻すべてを調査・撮影するということは「愚公山を移す」計画に違いありませんでした。何度も断崖絶壁に立たされ計画放棄の危機に見舞われました。そのため再度の科研の申請を

行いましたが、これでも不足するとわかり、次に文部科学省の私立大学学術研究高度化推進事業学術フロンティア「奈良平安古写経研究拠点の形成」を立ち上げました。科研の方は当初から都合七年を有して一応の報告書が完成しました。それが、『金剛寺一切経の総合的研究と金剛寺聖教の基礎的研究』(平成一六年度〜平成一八年度科学研究費補助金基盤研究(A)第一分冊・第二分冊。平成一九年三月)です。

第二分冊の金剛寺一切経の目録は圧巻です。一卷ごとに法量等の書誌学的な記述が記載されているばかりでなく、『大正蔵』との比定も行っています。これが本研究の画期的な点であり、写本一切経の調査項目にはじめて仏教学が存在感を示した濫觴であります。

*

*

文科省からの支援を得て開始しました学術フロンティア(平成一七年度〜平成二二年度)と戦略プロジェクト(平成二二年度〜平成二六年度)では

ニユースレター『いとくら』(1号〜10号)

善本叢刊(第1輯〜第9輯)

『日本現存八種一切経対照目録』

『古写経研究の最前線』

『東アジア仏教写本研究』

『仏教文献と文学』

等々を刊行しました。さらに国際仏教学大学院大学の図書館に日本古写経データベースを立ち上げました。金剛寺一切経と七寺一切経(調査撮影分を順次公開中)と大門寺一切経を大学図書館で閲覧できます。

*

*

七寺一切経や金剛寺一切経、また金剛寺聖教の調査研究に従事することになってから国内はもとより海外での調査も行うようになりました。

疑経の研究からペリオ本やスタイン本、また北京本(中国国家図書館本)やロシア俄蔵の調査、また羽田亨草稿『敦煌秘笈』目録の発見から羽田記念館に収蔵されていた写真アルバムから『法花行儀』(王重民目録等で「法苑行儀」とされていたもの)や『照明菩薩経』を見つけ、良忠の著作から同定することができました。これにより李盛鐸旧蔵本の真偽問題に筆者の立場を示しました。その後香雨書屋から『敦煌秘笈』影印本が刊行されました。敦煌本の面積上の比較では、ロシアよりも日本の敦煌本が多いことになります。

真福寺大須文庫の調査では以下のような典籍を新たに紹介することができました。

①『大毘婆沙論文義次第』(三分の二ほど復元。玄奘と普

光の共撰か)

- ② 『般若心経注』(八世紀初頭前後の刑部郎中封無待撰)
- ③ 『厭世論』(日本学僧に依る最古の禅籍、一一世紀以前)
- ④ 『金剛般若経解義』+ 『慧忠国師般若心経註』(底本天台羅適宋版)

⑤ 『阿弥陀仏経論並章疏目錄』(最古の浄土教典籍目錄。源信の弟子寛印撰か)

⑥ 『漸誘釋』(最古の日本撰述經典。『理趣釈』に擬す。異本に身延文庫所蔵本あり)

愛知県岩屋寺の南宋思溪版五千有余帖の調査では『梁高僧伝』に付された訓点(桂大納言入道のものであり、それは『平治物語』に出てくる参議藤原光頼のことですが、漢籍に通達した貴族が出家後残した『高僧伝』の読みが実に秀逸であります。

また名古屋市にある徳川美術館には長らく内容未詳の『神通論』という写本がありました(が、ようやくこれは円測撰『成唯識論別章』の一部と推定することができました)。

京都の南禅寺近隣にある茶道具を主とする野村美術館には『安樂集』上下二巻がありますが、これは高山寺旧蔵本で八世紀の写本です。私は唐で書写されたのではないかと思っております。

またアメリカのニューヨーク公共図書館(NYPL)には道

仏教文献との出会い(落合)

範撰『五智五藏等秘密抄』の善本があることを確認しました。反町茂雄目録には道筑と書かれていた写本です。

なお、先週行きましたメトロポリタン美術館にはパークコレクションの一部に『十牛頌図』(鎌倉写本)があり、頌には詳しい訓点が付されております。

さて、いよいよ本題へ近づいてきました。個人蔵ですが、梁武帝がかかわった『出家人授菩薩戒法』(P.296)との関連で神谷家蔵『在家人布薩法』(奈良写経)を調査しました。その時に智嚴の『註楞伽経』巻二と巻六も同時に調査させて頂きました。智嚴の『註楞伽経』七巻は続藏経に収録されていますが、収録巻は巻一(部分)と巻二と巻五です。つまり神谷家本の巻六は新発見の資料となりますが、これは既に重要文化財に指定されていますので再確認という表現が正鵠を射ていると思います。

神谷家本との出会いに依って智嚴撰『註楞伽経』を調査することにしました。それでは現在知られている古写経はどの程度現存しているのでしょうか。七巻の活字本と古写経を記してみましよう。

巻一…活字…『続藏経』(台湾版一七冊)には序無し。本文僅少。底本不明。

写本…京都国立博物館蔵。奈良時代写。重要文化財。

卷2…活字…『続藏経』（台湾版一七冊）にあり。底本不明。

写本…①神谷家蔵。奈良時代写。重要文化財。

②白鶴美術館蔵。

③油谷博文堂刊影印本（明治四五年一月）。断簡（卷末七一行）。

卷3…活字…ナシ。

写本…①書陵部蔵。奈良時代写。

②白鶴美術館蔵。

卷4…活字…ナシ。

写本…未詳

卷5…活字…『続藏経』（台湾版一七冊）。底本は知恩院蔵

写本。

写本…①知恩院蔵。重要文化財。巻尾に鶉飼徹定の識語あり。

②書陵部蔵。奈良時代写。

卷6…活字…ナシ。

写本…①神谷家蔵。奈良時代写。重要文化財。

②東博蔵。卷六断簡（卷末四行+尾題）。

③根津美術館蔵。卷六断簡。二点。

④センチュリーミュージアム蔵。卷六断簡。

卷7…活字…ナシ。

写本…①根津美術館蔵。奈良時代写。重要文化財。

②大東急文庫蔵。奈良時代写本（五月一日経 + 天平勝宝重跋）。

③国立国会図書館蔵：断簡。

④半蔵門ギャラリー出展。断簡（『楞伽経』卷四の「斷義而愚夫不知」から「不壞亦不去亦復不」）

付記…東京国立博物館植村和堂氏寄贈本。巻数不明。断簡（B3288）。奈良時代写。東京国立博物館蔵手鑑「月台」（七八葉）の内一葉が註楞伽経断簡（伝魚養筆）。

神谷家本の調査後、京都国立博物館に所蔵されている巻一を調査したところ序文の數行を除いて欠落の無い完本であることが判明しました。続藏経本とは大いに異なります。分量から見ますと続藏経本は京博本の約八パーセントの文字数しかありません。巻一も新出資料と言っても過言ではないでしょう。

次に調査したのが根津美術館蔵の巻七です。巻七は大東急文庫に五月一日経（天平勝宝重跋）があり、またほかにも所蔵されていますのでこれらの悉皆調査を行う必要があるでしょう。取りあえずは根津美術館蔵の巻七について簡単な紹介を試みたいと思います。

根津美術館蔵の『註楞伽經』卷七の経本文（『楞伽阿跋多羅宝経』）「爾時大慧菩薩復白佛言世尊唯願爲說一切菩薩聲聞緣覺滅正受次第相續」（T16:509a20）から始まり「得生梵志種及諸脩行處智慧富貴家斯由不食肉」（T16:514b25）で終わっています。

これは四巻本の第四巻にある一切佛語心品に相当し、巻末まで経文があります。巻頭から三五行を引用してみます。智嚴の註は双行細註で書かれています。双行は単行にして翻刻しました。句点等は付さずに白文のままにしています。

1. 楞伽阿跋多羅寶經 一切佛語心品 卷第七
2. 大敬愛寺沙門智嚴註
3. 爾時大慧菩薩復白佛言世尊唯
4. 願爲說一切菩薩聲聞緣覺滅正
5. 受次第相續自下明三乘正受但名同行異顯優劣者令脩勝
6. 行此大慧標宗興請也若善於滅正受次第
7. 相續相者將明學益此即牒詞我及餘菩薩
8. 終不妄捨滅正受樂門此初明入正益既善優
9. 劣則堅信不移於菩薩證門必無妄捨不墮一切聲聞
10. 緣覺外道愚癡次明捨劣益謂不墮二乘外道訖於寂
11. 樂愚癡之見佛告大慧諦聽諦聽善
12. 思念之當爲汝說將欲調問故先飾許大慧白佛

仏教文獻との出会い（落合）

13. 言世尊唯願爲說次明仰祈所許佛告大
14. 慧六地起菩薩摩訶薩及聲聞
15. 緣覺入滅正受按梵本三摩鉢底此云正受能滅諸惑身心安
16. 樂亦云正定以三乘名同今總標舉爲明優劣欣勝策脩自下數節校量造文
當悉今
17. 明六地起者以勵行與功少分同耳第七地菩薩摩訶
18. 薩念念正受次明七地勝行念念增明不同前見此則初標
19. 離一切性自性相正受以不著諸法而入正受故
20. 得念念增明非聲聞緣覺明異前二乘義該六地此亦初標
21. 諸聲聞緣覺墮有行覺攝所攝
22. 相滅正受此釋二乘劣行以彼滅能所心而取正受此則心想不忘墮於行
23. 覺是故七地非念正受結於七地不同二乘滅心取寂得
24. 一切法無差別相重明七地勝行達解諸法本無差別而得正
25. 受非分得種種相性明圓證法性非是分得覺唯
26. 切法善不善性相正受又明七地覺於諸法善惡二相本來平
27. 等以忘取捨名爲正受是故七地無善念正受
28. 結彼七地尚無善念豈有不善可存大慧八地菩薩及
29. 聲聞緣覺心意意識妄想相
30. 滅然約行淺深七勝於六今第二就滅心意識八殊於七此即初地
31. 乃至七地菩薩摩訶薩觀三界
32. 心意意識量離我所自妄
33. 想脩今明七地已還劣相謂彼觀三界知是心量見有我所可離斯則妄想而

34. 脩方之於八此乃未忘心識墮外性種種相患
35. 夫二種自心攝所攝向無知以七地妄

この巻七の冒頭から分かりますように著者智嚴は相当に嚴密な文献学的な注釈を行っています。一三行から一五行の經本文の「佛告大慧。六地起菩薩摩訶薩及聲聞、緣覺、入滅正受。」の「正受」に対して梵本の梵語の音訳を行って意味を解釈しています。「案ずるに、梵本三摩鉢底。此には正受と云う。能く諸惑を滅し、身心安樂なり。また正定とも云う。」(按梵本三摩鉢底。此云正受。能滅諸惑、身心安樂。亦云正定)。正受は梵語で三摩鉢底 (samāpatti) と言い、諸々の煩惱を滅ぼすので心身ともに安心安定すると解釈しています。その次に、正受は正定とも訳するとしているが、これは通常「等至」と意識するものであります。

智嚴は梵語に通暁していたので随所にその知識を披露しています、この巻七の中でも梵本の引用は「三摩鉢底」を含めて一カ所に及んでいるのであります。

一五行に「緣覺入滅正受按梵本。三摩鉢底、此云正受。能滅諸惑、身心安。」

三八二行に「身此列八識體相者。五法中名妄相思想所攝。以正智如如攝如來藏。按梵本不具據」

四四一—四四二行に「如彼優曇優曇鉢華。無已見今見當見。正梵云。烏淡鉢囉樹、高數丈。自非大聖與世方始生華。若無大聖三世之中无能」

五七一—五七二行に「旃遮摩納按梵本云。旃遮摩拏、比迦此之女人佛處大眾繫本盃而誇。其過三也。」

五七二—五七三行に「孫陀利女按梵本云。素駄嘿哥斯女。女人外道殺以誇佛。其過四也」

六九一—六九二行に「如旃陀羅正梵云。旃拏羅。此謂殺人及畜」

六九二行に「譚婆等梵云。湛曇」

七一九—七二二行に「次引事證成。按梵本云。僧訶燥駄素、翻云師子拏。此昔國王以食肉故。後便噉人臣下離德以肉之過王位尚夫況乎菩提。具如梵本及餘經所明。」

七七〇—七七二行に「或生陀夷尼 及諸肉食性按梵本云。茶吉尼、謂女人也。習行祓法、食人精血男名茶哥。東天北天多有斯類。過去以肉食餘習生此類中」

七七二—七七三行に「羅利猫狸等遍於是中生梵云。囉利婆、形似於人。筋力捷疾。食人獸肉血。竝宿報所生」

七七四—七七五行に「央掘利摩羅此舉餘部三經皆明斷肉然。正梵云。遇利摩洛鷄此云指鬘。以義在彼經故不繫述」

これらを見るだけでも智嚴が梵語に通暁していたことは明らかであります。しかし、大きな疑問が残っています。それ

は古写経、とりわけ書として高い評価を得て多くの写本が重要文化財として位置づけられています。本書の内容的吟味はこれまで全くなされてこなかったということです。中国仏教史上にも日本仏教史上にも本書の引用乃至言及が見られないのであります。或は私の見落としがあるのかも知れませんが、少なくとも重要文化財に指定されている京都国立博物館蔵本の巻一、根津美術館蔵本の巻七は活字にもデータにもなっていないことは明らかです。これは異なことではないでしょう。文化財として非常に高い評価を得ている古写経が、仏教学では全く「無視」されているからです。何らかの理由があつて看過されてきたのかも知れませんが、今日のよくな情報化時代にあつては原文の公開、原文の翻刻紹介は研究者の責務だと考えます。ほとんど知られていない唐代の僧侶が撰述した四卷本『楞伽経』の注釈本が現存しているのですからこれは取り組まなければなりません。著者智嚴は于闐国の質子として長安に送られてきた王家の人物です。出家後は頭陀行を行うなど厳しい仏道を真摯に歩んでいます。智嚴の伝記的解明と注釈書としての内容研究がなされるのは当然かと存じます。智嚴の著述と翻訳に関しましてはこれから詳しく研究していきたいと考えています。どうも御清聴ありがとうございました。

*本稿は『師子素駄婆王断肉経』等四部六卷を訳した智嚴の『楞伽経』研究」と題して講演したが、智嚴という人物が華嚴の智儼（六〇二―六六八）と勘違いされるのを危惧して題したものである。時間的關係もあり智嚴撰『註楞伽経』を詳説するまでに至らなかつたので本題に変更させてもらったが、そのような筆者の身勝手さを寛恕頂ければ幸いである。